

# 海 (かいし) 市

No. 10

## ● 詩

02 横山 仁 二百歳詩集

04 前田 勉 起 点

## ● エッセイ

08 片津 森 蝶ヶ岳から常念岳へ  
稜線漫歩 (1)

12 佐藤ただし 水田とツバメ (8)

17 横山 仁 雑 記 (10)

## 二百歳詩集

横山 仁

今川洋さんがつくりたかった

百歳詩集

「自分で読んでもわからない第一詩集」

と メモがはさまれていた『橋』

来年 木内むめ子さんがまとめたかった

九十歳からの詩集

わたしそびれたのは

篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと―人生は一人で

も面白い―』

ふたりが編集にくわわってできた

『続秋田詩花』

日本海のところに根づいている

ふたりの二百歳詩集は

空となり

エテルニテ  
永遠

\* 『橋』は、今川さんが三十九歳のときの詩集。知的で、イ  
マジネイティブな作品が多いので、たとえ作者であつて  
も、時が、読解しがたくしたのであらう。あとがきには、  
「随分無駄をかさね試行錯誤の道を行んできましたが、  
『朦朧荒漠』の詩圏にたどりついたでしょうか……」と  
ある。

## 起 点

前 田 勉

やがて

何回目かの季節が訪れ

深夜

蓄積された記憶と時間は

おだやかに

やさしく

誰彼の気配を消し

綿雪となつて降り積もる。

数えることをやめた頃から  
やがては巡ってくるはずの

起点

が

見えなくなってしまうた。

渦まく時間が

らせん状の内径を勢いよく昇り

天空へ

未知の私の空へ

飛んだ。

その時点から

折り畳まれたのかもしれない。

わざとらしく

そこへ隠れてしまったのかもしれない。

あるいは

漆黒の空間に紛れて

かつてに棲息しはじめたのか。

そう思ったことに戸惑う

無防備な自身の感情よ。

もしくは

自制心の喪失よ。

言葉以前に

数え忘れたのではなく

数えないようにしただけ

と

うそぶく気恥ずかしさ。

やがて

何回目かの季節は巡り

何回目かの一日が重ねられ

そして

記憶が形成されてゆく。



## 蝶ヶ岳から常念岳へ稜線散歩（一）

片津 森

長野県安曇野市内の三股登山口と蝶ヶ岳、常念岳は、地図で見るとトライアングルのように三角形の登山路で結ばれている。ガイドブックには、難所はなく、初めて北アルプスを縦走する者にも向いたコースだと紹介されていた。何より二つの山の間の縦走路は、穂高連峰や槍ヶ岳を展望しながらの稜線歩きが楽しめるという。また、春先、蝶ヶ岳には蝶の雪形が、常念岳には常念坊の雪形が現れ、田植えの時期を告げるのだという。

九月中旬、ここを縦走するべく安曇野市に向かった。出発する前日に見た蝶ヶ岳付近の天気予報では、概ね晴れるとのこと。気温は、高度三千二百メートル付近で摂氏二〜三度だった。それは奥穂高岳の標高と

大体同じで、蝶ヶ岳（二六七メートル）はそれより六百メートルほど低いので、標高差百メートルで気温〇・六度違ふとされていることから、蝶ヶ岳では四度ほど高い摂氏六〜七度位かと想定した。数年前に登った早暁の富士山頂の気温が七度だったから、その時を思い起こすと、衣類は長袖の下着に長袖フリースや薄手ダウンジャケットの持参は必須と思つた。

### 【前泊】

朝六時に自宅を発つた。日本海側の一般道や高速道を南下し、新潟からは北陸道、上越からは上信越道に入る。この辺りから高速道は高架橋を交え、農家らしい家々が遠い山の斜面の上の方まで詰めているような風景が見える。また、右側の窓外には妙高山と思しき山や黒姫山などがあり、ハンドルを握りながら、右や前方に現れる山岳をちらちら見れば、日本アルプスが近いものなあ、と山岳の気に触れながら走った。やがて長野自動車道に入り、安曇野インターを下りたのは午後二時半だった。

早く着いたので、豊科近代美術館に寄った。ここは高田博厚という彫刻家の作品を集めて展示していた。



ロマン・ロランやガンジーなどのブロンズ像があった。ロマン・ロランが高田博厚を「精神を形作る本当の芸術家です。彼は指で思索する」と評したとの説明があった。彼の彫刻は秋田県立近代美術館でも展示されているのを思い出した。

ホテルに戻ってからテレビを見てみると、北海道では大雨が続き、いつ土砂災害が起きてもおかしくないような危険な状況だと報じていた。先月、広島市では豪雨による同時多発的な土砂災害を蒙った。大阪でも大雨になった。そんな中でもこの長野に関しては幸い雨の予報は出ていないようだ。

### 【一日目】

朝、ホテルに近いコンビニで食糧を調達してから山へ向かった。三股駐車場（標高一、三五十メートル）にクマ出没の看板があった。こっちにも出たりするかと驚いた。東北や新潟などと違って北アルプス方面の人出のある山にはまさか出たりはしないだろうとは勝手な思い込みだった。そこでふとザツクの底の方に手をやると、いつものとおりクマ鈴はぶら下がっていたが、錘がない。だから音がしなかったのだ。いつの

間に外れてしまったのか。

八時四十五分に登山を開始後、かなり好調に登ってきた。蝶ヶ岳までのコースのちょうど半分に当たる「まめうち平」には登山地図上のコースタイムよりも四十分も早い十時半に着いた。それから二時間余りで大滝山分岐まで来た。この分岐を左に曲がれば大滝山から徳本峠、上高地へと下っていける。ここを曲がらずに進むと蝶ヶ岳へはあとわずかだ。やがて草原から人の頭が見えると、男性が下ってきて「山頂はすぐここですよ」と言って足早にすれ違っで行った。

テント場を抜けると、すぐそこは山頂だった。あっけないくらいで十二時五十分着。しかし、それより何より、いきなり向こうに壁のように立ちはだかっている穂高連峰に目を奪われた。奥穂高岳はどれだろう、涸沢カールは、と視線をゆっくり右に移していった先に槍ヶ岳が見えた。目を瞞っているうちに、ガスに隠れたり、現れたりしている。右から左へゆっくり、そしてまた左から右へ。圧倒的な、という冠をこの展望に与えても大げさではないなあ。あのギザギザした岩稜の険しさ、青黒くまた緑の山巒の盛り上がりの高さ

深さ。例えばと、表現に凝ってみると、頂をもつ巨人が、髪の高い黒や灰褐色のマントを着ているような、両腕を肩の方まで上げてマントを広げたような、と言えはいいか。

先ほど大滝山分岐で立ち話をしていた二、三人のうちの一人がやってきたので、いっしょに山座同定を始めた。涸沢カールはあれ、奥穂はあれ、北穂は、前穂は……とかなり詳しい。登山同好会に入っていた若い頃、方々の山に登ってきたのだそうだ。この人と蝶ヶ岳山頂の指導標のところで互いにスナップ写真を撮り合った。

寒くなってきたので、ダウンジャケットを重ね着して山小屋や山々をスケッチした。奥穂にはごく遠慮いただいて、槍ヶ岳と山小屋を左右の両端に無理に入れた。山小屋の屋根は赤いので色彩のポイントになる。それにしても、涸沢カールがあれだというなら、あのだどこかに登山コースがあつて、そこを奥穂に登っていくのだな、それにしても何と切り立った壁を登っていくことだろう。友人のKは数年も前に奥方と奥穂へ行ったというし、去年、蓼科山の双子池山荘で布団が隣り合

わせだった七十二歳の男性は、紅葉シーズンに入ったら涸沢にテントを張ると言っていた。自分もいつか奥穂に登り、向こうからこっちを眺めてみたいものだ。そんな思いが湧いてきた。

まだ午後三時にもならなかったが、山小屋（蝶ヶ岳ヒュッテ）に行つて受付を済ませた。寒くなったので、ザックから取り出したビーフジャーキーを片手に、売店で「一期一会」とラベルのついたワンカップを買い、外のベンチでやった。

そのとき、方位盤のある方から誰かを呼んでいる声が聞こえた。名を呼ばれた人が小走りに向かいながら口にした言葉がブロッケンというのだ。何、本当かと自分もヒュッテのサンダル履きのまま、彼らの向かった方へ急いだ。方位盤の近くから西側は足元が崖になっていて、その先の一帯にはガスが広がっていた。先に着いた人たちはそのガスの中を覗いているふうだった。やがて、見た見たという素振りや彼らが去つた後で、自分も同じ場所に立つて目を凝らすと、ガスの中に虹色の光の輪がうつすらと見え、中心にぼんやりしたのが見えた。他の人たちがしていたように自

分も真似て手を上げたり振ったりしているうちに、それが自分の影であることが分かった。ああ、これだな。これが初めて見るブロッケン現象だった。

\*

夕飯時、右隣の席の人に声をかけてみると、長野市内の人で、やはり三股から登ったと言った。長野市内からだと言われれば数時間で名だたる山の登山口に着けるからいいスなあ、という、まあ、そんなこともいえるかも、とのことだった。その彼が食事を終えて席を立つと、左隣の人がこちらに声をかけてきた。秋田から来たそうだが、羨ましい、という。なぜ、という顔をすると、自分は茨城から来た。深夜に自宅を発ち七時間運転して三股に車中泊をしたという。秋田と違って茨城には高い山がない、あると言えば筑波山くらいのものだ、という。栃木や群馬の山が近いのではないかと、それはそうだが、自分は茨城といつても房総半島の先で海に突き出た銚子にいるから、簡単ではないのだという。ああ、それで、と合点がいった。秋田にしていることを羨ましいと言われて、秋田ってそうだったの？ と何やらこそばゆく、ニヤつきなが

ら、ご馳走さんと手を合わせて食事を終えたのだった。今日は登山口の三股から三時間半かけて、約一千三百メートルの標高差を登ってきたんだなあ、明日の出發は早いから寝てしまおうと、早めに布団にもぐったが、なかなか眠れなかった。

\*

下山後に新田次郎の「槍ヶ岳開山」を読んだ。これは、文政十一年（一八二八年）に槍ヶ岳山頂への道を開いた播隆上人が主人公の小説だが、上人たち一行は、今の安曇野市三郷小倉から鍋冠山、大岳（大滝山）、蝶ヶ岳山頂を経て梓川畔に下り、槍沢から槍ヶ岳に登ったと書かれていた。この前自分が踏んだ山頂は、百八十年余りも前には播隆上人が槍ヶ岳を目指す途上で越えた頂だったことを知った。また、ブロッケン現象を播隆上人は槍ヶ岳と笠ヶ岳で見たが、虹の輪の中に彼が見たのは阿弥陀如来の姿であったと書かれていた。まだ日本に西洋発の科学が広まっていない頃のことであり、初めて見たときの驚きは僧侶であればこそその解釈に結びついたのだろうと思った。

山日記（平成二十六年九月）から

## 水田とツバメ（八）

佐藤 ただし

### ・土はそこにある

七月と八月に洪水をもたらした今年の雨は、十月下旬にも長雨になり、暗渠の利かない田んぼはぬかるみ、イネを刈り取るコンバインが通った跡は、戦車が田んぼの中を走り回った跡のように痛々しく、車輪の跡が残っていた。何とか収穫は出来たが、雨の影響や収穫直前に雹にやられて、収穫量は例年に比べ一割以上少なかった。田んぼもこのままにしておくかと轍に雨が溜まって排水されず、来年の春になってもこのままだ。そこでスコップや三本鍬を使い、盛り上がった土を低い所に運び、車輪の跡が目立たなくなるようにしたり、排水溝を掘ったりした。

家に帰り家族にこのことを話すと、かつては稲刈りに後にコンバインが通つてできた轍を、手で均していた人もいたそうだ。こうしておくで、冬に降る雪の重みで土の高い所は押さえられ、春になると田んぼの高低が目立たなくなるのだという。確かに土はやわらかく、手で均すことが出来るくらいだった。

俳人、金子兜太の「私はどうも死ぬ気がしない」（幻冬舎）という本の中に、「生まれ育つた土地があなたを支えてくれる」という一章がある。

「生まれ育つた土地のことを、その人の産土と言います。」「生まれた土地で今も暮らしている人もいますし、その土地を遠く離れ、都会で暮らしている人もいます。どちらだとしても、自分が生まれ育つた土地を大切にしたいほうがいい。それだけははっきりと言えます。」

「生まれ育つた土地はどんな時でもそこにある。」「長い年月が経てば街の様子が多少変わることはあるでしょう。しかし土は変わりません。どんな時でもそこにあります。」

土はそこにある。スコップで田んぼの土を動かして

いた時、この田んぼの土はずつと変わらずにここに  
あつたということを実感した。長い間、自分の意識が  
田んぼから離れていた間も、この土はずつと変わらず  
にここに残っていた。

変わらないものがあるということは支えにもなる。  
長雨の影響でぬかるんだ田んぼも、来年の春にはまた、  
イネが植えられているだろう。土に働きかけ、土から  
得られるものを享受してゆけばいい。

### ・旧雄物川（秋田市仁井田・古川）

旧雄物川というと秋田市茨島の河口付近から秋田運  
河に通じる旧雄物川を思い浮かべるが、それ以外にも  
自然発生的なものや、洪水の被害を減らすために人為  
的に作り出された旧雄物川もあることを最近知った。

その一つに、江戸時代、雄物川下流域を直流化する  
工事が行われ、新しく開削した新川（雄物川）に対し  
て、河跡湖として残った「古川」がある。

少し長くなるが、【雄物川の流路の変遷】 齋藤實則

編著（国土交通省東北整備局、湯沢河川事務所発行）  
の「雄物川下流の古川の地名」という項を引用する。

「当時の雄物川の流路は豊岩小山付近から北東に大  
きく蛇行し、さらに小阿地村の西から流れを西方に変  
え、目長田村・二（仁）井田村の南部付近を西流して  
大野村・百三段（新屋）村の方向に流れていた。四ツ  
小屋は雄物川の左岸にあり、豊巻村の地続きであった。  
このような蛇行と流域の小河川からの河水のために雄  
物川は頻繁に洪水に見舞われ、流路にあたる沿岸村落  
である四ツ小屋地区、仁井田地区・牛島地区などは、  
氾濫のため毎年のように難渋した。『秋田県の地名』（平  
凡社）によれば、当時の秋田藩の家老梅津半右衛門利  
忠（三代目）は二（仁）井田村に知行地があつたこと  
もあり、多年にわたる洪水の防止策として、雄物川の  
改修による豊岩小山・豊巻・百三段石田坂の直流化を  
計画した。万治二年（一六五九年）、藩よりその大改  
修の許可を得、翌三年（一六六〇年）豊岩小山と百三  
段石田坂間を掘り替えてまっすぐな流路とする、所謂  
シヨートカット（捷水路）といわれる雄物川の「河道  
掘替工事」（新川の開削）を着工した。」とある。

また、増補「梅津利忠の生涯」(武田憲雄著)によると「仁井田村(現秋田市仁井田)開発は梅津氏四代にわたる約七九年の努力の結果である。開発に着手したのは元和二年(一六一六年)の二月初め利忠の祖父梅津半右衛門憲忠である。」「しかし水利に恵まれないので、宝龍先付近に水源をもとめたものの事業半ばの寛永七年に歿した。」「次いで利忠の父、二代半右衛門忠国が、偉業に着手するが間もなく病死した。」「万治三年(一六六〇)利忠は二十三歳で先代の意志を継いだ。まず四ツ小屋、石田坂間を直流するようにした。』と書かれている。

前述した「雄物川の流路の変遷」で引用されているが、秋田県立公文書館に所蔵されている「出羽国一国絵図」(雄物川下流域)正保四年には、この工事を行う前の蛇行している雄物川が描かれている。この絵図を見ると雄物川が小山村付近から北東に大きく蛇行し、小阿地村付近を通って石田坂へ流れているのがわかる。

七月の洪水のこともあり、当時の川の流れを辿りたくなり、古川に沿って車で走ってみた。

古川の源流がどこになるのか分からなかったため、終点にあたる四ツ小屋と仁井田の境界にある、古川排水樋門のあたりから出発することにした。この辺の川幅は一五メートル程で、両岸はコンクリートで固められている。西側は住宅地で東側は田んぼになっている。今年の七月の大雨の際は、雄物川の水位の上昇に伴い、河川が溢れ道路も冠水したあたりだ。

古川に沿って車を走らせ、交差点を直進し、「下久保新橋」という小さい橋のある交差点を右折する。この辺も川幅は一五メートルほどあるが、水量が少なく今は四〜五メートル程だ。

国道一三号線の交差点を渡る。この辺りから川は東に湾曲し、仁井田目長田跨線橋から横山金足線立体交差付近にかけてカーブを描いている。この辺の川幅は一〇メートルもあるだろうか。所々葎が茂り、川底も浅く泥砂が見える。

カルガモが数羽エサを取るために水の中に首を突っ込んでいた。道路から川底までの川の深さは五メートル位か。

水路の脇の道路をゆっくり進んでゆくと、奥羽線の

線路と交差するため、一度、国道一三号線に戻り、仁井田目長田の跨線橋を渡り、横山金足線の立体交差を右折して小阿地に向う。川幅四〜五メートルの「古川」は田んぼの中を目立たず蛇行し流れていた。古川敷辺りまで来ると川幅は三メートル程になり、両岸に枯れた草が生い茂り、川というよりは排水路といった感じが色濃くなってきた。灰色の上空をハイタカらしき鳥が細い翼を広げエサを求めて飛んでいた。

農道を川に沿って走ってゆくと、四ツ小屋下河原の簡易郵便局という看板が目に入ってきた。この辺になると川幅は一・五メートル位になり、まさに田んぼの排水路だ。細くなった「古川」の脇を通ってゆくと、静かに水を湛えた沼が見えてきた。ヤブレ沼だ。

名前だけは聞いたことがあったが、実際に近くで見たのは初めてのことだった。沼の広さは六〇〜七〇メートル位か。沼の東側半分は田んぼの畦と隣接し、反対側は住宅があり、沼のそばに白い車が一台停車していた。沼は車を止めた道路から五メートル位低い所にある。沼の淵には釣りをしやすいように、等間隔にフォークリフトの運搬用パレットが置いてある。その

一つにテントが一張設置され、釣り人が竿を垂れていた。

この沼の南側二〇〇メートル位離れたところに岩見川の堤防があり、その前に杉の木立に隠れた社がある。その向こうに岩見川が流れている。

この沼には周囲の田んぼの排水や住宅地に降った雨水がここに集まってきているのだろう。それ以外の水路を見つめることは出来なかった。ということはこの沼が古川の出発点になるのだろうか。終点の古川排水樋門までの距離は一〇キロメートルもないだろう。

ヤブレ沼の由来は、安政元年（一八五四）六月二〇日未曾有の大洪水が四ツ小屋を襲い、雄物川と岩見川の大増水により、武左衛門堰と呼ばれる堰の土手が破れてきたため、「ヤブレ沼」と呼ばれているのだという。

江戸時代に新田開発がされる前は、この辺は葦が生い茂る、荒蕪地だったという。当時の雄物川には堤防もなく現在の古川のように蛇行していたとすれば、ちよつとした雨でも周囲は広範囲に洪水になっていただろう。

このヤブレ沼のそばを武左衛門堰が通っている。この堰は主に四ツ小屋の田んぼを潤している用水路で、「古川」は排水路の役目を担っている。

「雄物川の流路の変遷」や「梅津利忠の生涯」を読むと、洪水による雄物川の氾濫は、数年に一度の間隔でこの地を襲い、住民を苦しめていたことがわかる。また、旧雄物川の流路と思われる古川に沿って車を走らせてみたことで、今は川向になっている四ツ小屋や仁井田の歴史の一端に触れることが出来た。



## 雑記 (10)

横山 仁

てほしいと悲痛に叫びつづけた七十数年であった。その〈生〉の世界は、人に認められない苦惱そのものであった。しかし孔子は、それをどのようにして耐えるべきかと、自戒の言葉を自分に読きつづけ、不遇の運命と闘いつづけたのである。》  
(引用終わり)

以前「匪」で、菅谷規矩雄氏の文章を引用しながら、人は、パラダイム(時代の思考の枠組み)をこえることはできない、というようなことをかいたが、加地伸行『孔子 時を越えて新しく』(集英社文庫、1991)でも、孔子が当時の共同体社会の通念にしばられていたとあり、孔子をそのように時代に戻してみることがなかつたので、なるほどなとおもった次第である。また、聖人とか道徳家としての孔子しか頭にないのだから、以下のような言説は、おもしろかつた。(引用からだけだと、たんなるアホにしかおもえないが)

(引用開始)

《孔子の生涯とは、自分の才能を、自分の能力を認め

同じ著者の『「論語」を読む』(講談社現代新書、1984)では、「己れが現在かかえている問題の類型を、『論語』の中に、いくつも見出だすことができる。だからこそ、『論語』は人々に長く読み継がれてきたのである。」

オルテガふうにいえば、どこにじぶんの「世界」をみつけるかということになるのだろうが、「論語」も、訳者?によって読みがだいぶかわるらしい。この本だったか忘れたが、オーソドックスではない、もっと現代的な読みの本も紹介している。

こうしたとき見つけたのが、「東大話法」の安富歩氏による『超訳論語』(デニスカヴァー・トゥエンティワン、2012)であった。(you tube で、その一端を

みることができると

著者はいう。

《私は論語の思想を、次のように捉えている。

「学習」という概念を人間社会の秩序の基礎とする思想である。

論語の冒頭は、「学んで時にこれを習う、亦たよろこばしからずや。」という言葉である。この言葉に、論語の思想の全ての基礎が込められている、と私は考える。

人間にはなにかを学びたい、という好奇心がある。その好奇心によって外部から知識を取り入れても、その段階では自分自身のものになっておらず、そればかりか、取り入れたものに自分自身を譲り渡す格好になっっており、「振り回され」ている。

それが修練を重ねていると、あるときふと、しつかりと自分のものになる瞬間が訪れる。このとき、学者は学んだことに振り回されるのをやめて、主体性を回復する。これを「習う」という。

そうなったとき、人は、大きな喜びを感じる。人間は、そういう生き物である。この「学習」のよるこびに孔子は、人間の尊厳と人間社会の秩序との根源を見た、と私は考えている。》

ブツダがいったこととおなじだな、とおもえる言葉にも出くわしたり、「論語」も、案外おもしろかったんだな。

山田史生『孔子はこう考えた』（ちくまプリマー新書、2011）も親しみやすかった。また白川静『孔子伝』（中公文庫、1991）には圧倒された。

もともと、どれもよんだというだけで「習う」とはほど遠い。

\*

だいぶ前に、ヒストリーチャンネル？のドキュメンタリーで、毛沢東のシリーズをみたことがある。農業政策に失敗し、それで権力闘争から失墜しかけたときに、文化大革命を起こし、紅衛兵を利用して、権力を

取り戻した、というような内容だったとおもうが、前号の毛沢東の虐殺にかんして、「どのようにして人殺しをしたのか」という感想をもらって思い出したのが、そのドキュメンタリーであった。また、文化大革命については、「ラスト・エンペラー」だったかでも、紅衛兵が非道なことをする場面をおぼえている。

(引用開始)

毛沢東が行った「大躍進政策」では農業共同体をつくり集団化し、工業でも生産性強化に力を入れた。しかし十分な設備もなく農民たちに原始的な方法で鉄を量産させるなどしたため大量の粗悪品が出来上がるなどして大失敗。さらには1958年から3年続けて大災害が続き農業でも大打撃を受けた。2、700万人以上餓死したとされる。

▼出典毛沢東の文化大革命とは

その後、政策の失敗の責をとり一時は退任した毛沢東だったが資本主義的な政策をとっていた次政権に激怒。その後体制奪還を目論んだ毛沢東は文化大革命を掲げ

た。その革命に動員された青年たちは社会主義を守る兵士といった意味の紅衛兵（こうえいへい）と呼ばれ、次第に拡大。

武闘を繰り広げるうちに血気に逸った紅衛兵は統制不可能となる。また、彼らを支持していた人たちも迫害の対象とされ、つるし上げられたり、殺害されたりと中国は大混乱に陥った。この文化大革命で3000万人が虐殺され、更には様々な文化遺産も破壊されたという。

後に毛沢東の走狗（そうく）であった紅衛兵は、【用済み】となり、島流しにされた。

▼出典毛沢東の犯罪を忘れるな—4000万人以上を死んだ文化大革命と大躍進政策  
(引用終わり)

パラダイムということでは、つぎのようになる。（日本では、吉本隆明と槇谷雄高の「コム・デ・ギャルソン論争」がおこっている。）

(引用開始)

彼はフアツシヨンを憎み、女性が化粧をしたり、お洒落をしたりすることも好まなかった。彼は終生、貧農的勤労主義あるいは小農的精神主義を捨てることはなかったのである。だから、彼は文化大革命で、知識人と学生を争わせた後で、両者を刑務所に入れる代わりに、田舎に追いやって百姓仕事に精出させたのである。

▼出典毛沢東の光と影  
(引用終わり)

こうした流れは、ポル・ポトに関係してくる。

(引用開始)

『1970年、カンボジア王国で親米軍事政権によるクーデターが発生した。シアヌーク国王は失脚し、中国政府に匿われることになった。中国の抗米という東南アジア戦略とカンボジアの親米ロンノル政権を倒すために、中共はかつて中国国境内でゲリラ戦の訓練を受けさせたカンボジア共産党の幹部、ポルポト、キューサンファン、ソンセンらを通じて、武器や軍事顧問を提供、カンボジア国内にあつという間に二万人あまり

の「クメール・ルージュ」解放軍を組織させた。二年あまりの戦闘を経て、クメール・ルージュはプノンペンを陥落させ、民主カンボジアを建国した。

この期間、ポルポトは三回に渡って秘密里に北京へ行き、指導者である毛沢東に謁見し、状況報告を行うて指示を仰いだのである。毛沢東はこのカンボジアの教え子を非常に気に入っていた。ポルポトは毛沢東思想を受け継いでおり、毛沢東が1958年段階でまだ中国国内で実行できずにいた「家族や貨幣を消滅させ、都市と農村間の格差をなくす」というきちがいじみた共産主義の理想を、カンボジア国内で大胆に実践したのである。

その結果、クメールルージュが支配したたった二年間の間に、200万人あまりの人々が殺害されたのだ。その中には20万人あまりの華僑も含まれている。ベトナム軍がカンボジアの首都プノンペンを陥落させる直前、毛沢東と中共中央は王東興（王は三水編）の率いる軍事代表団をプノンペンへ派遣し、ポルポトや

キューサンフアンらを元きづけ、はかない支援を行った。

(引用終わり)

出典として、「今日は香港の民主系雑誌「争鳴」8月号に掲載されていた「中共愛中国ma? (“ma”はボメラでは打てませんね。意味は“中国共産党は愛国なのか?”です)」の一部を訳してみました。」とあった。

クメール・ルージュについては、「[killing field]をみたぐらいただが、wikipediaには、「本多と同じ朝日新聞出身である井川一久は、この映画（および原作）の欠点として、ポル・ポト政権による殺戮と文明破壊の実態を極めて不十分（せいぜい2、3割）にしか伝えていないこと、クメール・ルージュについての背景説明がまったく描かれていないことをあげながらも、現実起こったことを非常に不十分ではあるが伝えており、かなりのところまで歴史の真実に迫ろうという意思があった。」とあった。

この「雑記」をかき、あらためて、毛沢東やクメール・ルージュをしたが、前号の虐殺者のなかに日本の天皇がなかった。

たとえば、田中伸尚『ドキュメント昭和天皇』第六巻（緑風出版、1990）では、かいている。

「ここに一つのデータがある。一九五一年刊の“This war Business”：A.G.Enookによる第二次世界大戦における各国別の戦死その他の被害者数である。その中に「一般市民の死者及び行方不明数」があり、ポーランドとソ連が五〇〇万人、ドイツが六〇万人、しかし中国については「膨大にして計量不可能」と記されている。現在でも二千万とか三千万とかいわれる中国民衆の被害が「天皇の軍隊」によることは否定しがたい事実である。」

\*

亀さんの「人生は冥土までの暇潰し」に、ダダの詩人高橋新吉の名が出てきた。面白いので、ながい紹介する。

(引用開始)

升田幸三と酒 (10/15)

ここで、今東光和尚が升田幸三について語っていたのを思い出したんで、以下に転載しておこう。

升田名人も舌をまいた禅僧

今先生、あなたは三島竜沢寺にいた山本玄峰という禅僧を知っているだろうか。彼をどう思うか聞きたいのだ。

というのは、将棋四百年の歴史の中で最強といわれる大天才升田幸三九段が、こういうことをいっていたからだ。

「なかにひとり、衣にクツをはいてヒヨロヒヨロしよる坊さんがいる。わたしは、妙な恰好の坊さんやなと思うてね。しばらくうしろ姿を見ておると、何か魅きつけられるものがある。この妙な坊さんが、だんだんとぼくには大きくみえてくる。そのうちに

だな、この坊さんが動くよ、まるで岩が動くようにみえてきた。わたしや、世の中にはえらい人間がおるもんだとびびりした……」

それが静岡県に住む山本玄峰という人だと教えてもらったが、その人がどういう人なのかは知らないが、とにかくこんな人物に会ったのはこの老師ひとりだ、と言っていたからだ。(山形県新庄市 田宮俊一)

親しくおつき合いしたことはないけど、何回かはお目にかかっている。ずいぶんな年でおられましたがお。この方は臨済禅で、道場は非常に厳しくて、勤まらずに逃げ出すのが多かったというくらい辛辣無比たる老師だった。しかし、非常に愛情の深い人で、富士山下の三島の竜沢寺という寺で教えていられたが、もう亡くなった方だね。

この人のところで修行した人のひとりに、ダダの詩人で高橋新吉という有名な人がいる。これはもう手のつけられない奴でた。ダダで無法でアウトローや。それが年とってから何を感じたのか竜沢寺へ飛び込んで、

坊主にはならなかったが居士として下さい。玄峰老師にどつかれてね。そこで相当修行してからダメだから脱却して、禪宗がかったまともな詩を書き始めたが、やがて気違いになったという噂があるくらい、無茶苦茶な奴だった。それが玄峰老師のおかげで人間らしくなってきたじゃないか。

佐藤春夫のところへも出入りして破門くったり、もう無茶苦茶だったんだ。

また晩年まで非常に老師に可愛がられ、老師に教えられ、叱られもしたし褒められもしたし、老師にもまた非常によくしたのが田中清玄なんだ。ああいう人たちに、ひとつのバックボーンを作ったのがこの人でね。大変な人だった。

ある時、ある会議に出て玄峰老師にお目にかかった。そうしたら、もう耳が遠くって何言ってるかわからない。と、「今さん、もう私はダメだよ。耳も聞こえんし、何だか生きてるんだか死んでるんだか……もうダメだよ」って。「だけどお声聞いていますと、まだ若い奴など怒鳴られるようなお声してますね」と言ったら、「うん。怒鳴ることは怒鳴る」って。やっぱりその時なん

か、ギロツとした声を出してね。

(中略)

とにかく、その(高松宮)妃殿下がご会釈するくらいのお僧なんだ。だからオレはその時に、この老師くらい貫禄が出て、妃殿下が「お先にどうぞ」と言われるくらいまでならんと人間あかんと思ってつくづく眺めたんだがね。そういう人だよ、山本玄峰という方は。

『最後の極道辻説法』p.137～140

(引用終わり)

ちなみに、「忍び難きを忍び、耐え難きを耐え」は、山本玄峰老師が鈴木貫太郎首相に宛てた手紙から生まれたという。(『和歌山県史 人物』)

\*

前号で「はばき脱ぎ」のことをかき、そのなかで「わらんじしめ」にふれたが、合評会で佐藤さんに、押切順三さんの詩「かわいそうな僕——一九四二——」に立ちはいあるいはわらんじしめと称して

## あとがき

◆鳥海町百宅の松皮餅は美味かった。餅自体の味というより餡子がいいのだと思う。餅の中に繊維が混じり、餅全体に赤みがあるのは、赤松の内樹皮を煮てつぶしたものを練り込んであるというから、そのせいだろう。天明の飢饉の際の救荒食とか、矢島藩主が四国にいた時に兵糧攻めにあった際に作ったとかの説があるそうだ。も一度食べたい。も一度行ってみよう。(K)

◆雪が降る前に白菜を取り込もうと畑に行った。雨やみぞれにたたかれた白菜は心持ちやつれた感じで畑に並んでいた。そんな白菜を両手で引っこ抜いて、葉の根元に使い古した包丁を入れると、根の周りにミミズが付いていた。シマミミズか。よく魚釣りに使ったミミズだ。彼らは白菜の根の周りで冬眠するつもりだったのかもしれない。気の毒だがミミズには土の中に入れてもらい白菜だけ軽トラに積んで帰って来た。(T)

◆冬タイヤの空気圧を調べてもらったところ、ゴムが減っていて夏タイヤとおなじだといわれ、交換した。2年がいいところかな。(J)

◆早くも10号。もしやと思って創刊号の奥付を確認したところ、今年9月で2年を数えていた。思うと、ぐうたらで遅筆な私は原稿締切にいつも急がされてきた感がある。逆に言えばこの締切があるから思うこと書くことが危うく繋がってきたわけで、これは感謝すべきことなのかも知れない……(B)

「海市」第10号

2017年12月12日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方

門口で酒を飲ませるのが、この地方のならわしだ。

もう門出だ、みんなさようなら、

僕は立ちあがって

なみなみとつがれた盃をあおった、

しまった、酒はこぼれて僕の胸をぬらした。

という詩行があると教えられた。(引用は、『秋田の詩

人 〈沢木隆子・押切順三・畠山義郎・小坂太郎〉教

育企画出版、1989による)